OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

保管費用と運送費用

——安部教授および通説に対する一批判——

橋本　勲

一

戦後、我が国における資本論研究は、さながら堤防を破った怒濤の如くに凄じい勢で展開された。特に終戦直後の五年間における論争は極めて活潑であった。その結果それぞれの領域においてかなりの収穫をもたらし、その後も地味な研究成果が次第に発表されているようである。しかしながら、流通諸費用や商業資本についての研究は、他の領域にくらべてあまり進んでいるとはいえないように思われる。例えば、第二巻においても、再生産論（第三篇）の研究にくらべて、流通諸費用（第一篇、第六章）にかんする研究は著るしく弱く、また第三巻においても、利潤率の傾向的低落の法則（第三篇）や地代論（第六篇）の論議は極めて活潑であったし、さらに利子生み資本（第五篇）についての研究も最近に至って優れた成果が発表されているが、他方、商業資本（第四篇）にかんしては、殆んど立入った究明がおこなわれていないように思われるのである。

このことは一つには流通諸費用や商業資本の問題が極めて複雑で困難な問題領域に属するためでもあろう。けれども、流通費用に対する研究がないわけではない。既に幾多の先駆的な研究がみられ、私もそれぞれ教えられる

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ところがあった。しかし同時に幾多の点について疑問を抱かないわけにはゆかなかった。そこで本稿では、この先学者の研究に対する私の疑問の一端を提出するとともに、不十分ながら私なりの解釈を述べ、広く御教示を仰ぐ機会を得たいと思う。

さて、流通諸費用にかんする研究を吟味してみると、従来の見解では、流通諸費用のうち、純粋な流通費用と、これに対する保管費用と運送費用との相違点、つまり後の両費用が生産過程の費用である点が不当に強調され、後の両費用と本来の生産過程の費用との相違点が曖昧になるという難点があった。具体的にいうならば、保管労働や運送労働は、利用効果という「使用価値の一種」を生み出し、「価値を創造し」「価値増殖を遂げる」という解釈が通説であったが、このような解釈は両費用を本来の生産費用と混同した理論ではなかろうかと思われるのである。

そこで本稿では、先ず第一に、安部隆一教授の「流通諸費用の経済学的研究」に対する私の疑問点を卒直に提出するとともに、第二に、右に並べた保管費用と運送費用の性質にかんする問題を、使用価値と価値との二点をめぐって考察してみたいと思う。結論からいうならば、第一の使用価値については保管費用と運送費用が「使用価値の一変種」を生み出すという見解は誤解を生ずる。両費用は利用効果を生み出すが、使用価値は生み出さないという点をはっきり理解すべきであると考える。第二に、価値については、両費用が「価値を創造し」「価値増殖をする」というのはゆきすぎである。この問題については社会的観点と個別的観点とを明白に区別し、社会的観点からは、両費用とも生産物の控除をなし、剰余価値を減少する、という点をはっきりと理解すべきであると考える。

本稿で述べたいことは要するにこの二点にすぎないのであって、以下ではこれらの点を一層細かく述べてみただけのことである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

二

周知の如く流通諸費用は、三つの部分にわけられる。純粋な流通費用、保管費用、および運送費用、がこれである。このばあい、純粋な流通費用は、他の二つの流通費用とはことなり、「価値を商品形態から貨幣形態に転態するために必要な費用」[1]であり「価値の転態」[2]「商品の形態転化」[3]のみにかんする費用である。したがって本来的流通過程において生ずる費用である。これに対して、保管費用と運送費用とは、流通期間において発生する費用であるという点では純粋な流通費用と同一であるが、しかし本来は流通過程において生ずる費用ではない。「この流通費は生産過程――といっても流通においてのみつづけられる、つまりその生産的性格が流通形態によって隠蔽されているにすぎない、生産過程――から生じうる。」[4]費用であって、いわば「附随的な、流通過程の内部でつけ加わる、生産過程」[5]から生ずる費用である。

このような純粋な流通費用と保管費用・運送費用との基本的相違が注意されなければならないことはいうまでもない。しかしながら、従来の見解では、主としてこの相違点のみに注意が奪われ、その結果、本来的な生産費用と保管費用・運送費用との区別が曖昧になり、混同視される誤りがみられたように思われる。(ここで費用というばあい、それは資本の支出ではかられる資本家的費用の意味ではなく、労働の支出ではかられる現実的費用の意味であり、生ける労働または対象化された労働の支出、の意味である。)この点をさしあたり従来の代表的研究である安部隆一教授の所説について考察することにしよう。このばあい、運送費用は保管費用と基本的には同じ性質の費用であるので、ここでは運送費用を省くことにし、主として保管費用にかんする叙述を中心にして考察を進めてゆくことにしよう。

安部教授は、保管費用と売買費用との相違を説明され、「保管費用は、等しく流通費用なる売買費用とは異なり

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

流通費用でありながら生産的性質を有している。」[6]と述べられ、さらに「流通費用でありながら生産費用であるのは如何なる根拠に基くのであるか」と問題を提出し、生産的であるという論拠を極めて詳細に分析されている。

教授は先ず保管によって、主観的にその商品の価値が増加せしめられ、「時間上の価値」(time value) がつくり出されるという説、また商品にかんする時間上の障碍が克明され、需給が調節されるという説を斥けられ、さらに、生産物の使用価値の減少が保管によって制限される、という説も批判されている。このばあい、後の「使用価値の減少の制限」を生産費用の論拠とする説を批判して、「この説を貫けば、保管費用一般が生産費用であると云はねばならぬ。」と述べられ、在荷形成の二つのばあいの峻別を主張しておられるのである。この点には私も異論があるわけではないが、後にみるように、このように批判された教授自身の説に対してもやはり同じような批判があてはまるのである。ともあれこの在荷形式の二つのばあいとは、ローゼンベルグのいう第一種保管費用と第二種保管費用の区別をいうのであるが、この区別については、教授の所説の吟味から少し離れることになるが、順序として一応説明しておくことにしよう。

保管費用はいうまでもなく商品の在荷形成にともなって発生する費用であるが、この商品在荷がいかなる事情によって生ずるかによってその性質が異なってくるのである。一般に社会的需要を規則正しく充たすためにはいずれの社会でも一定の範囲の貯蔵品をもたなければならないという必要が生ずる。このような貯蔵は「あらゆる社会形態に共通」なものであって、いかなる社会においても避けることができないものである。このような事情にもとずく在荷形成は、資本主義社会においては「商品在荷は、ある与えられた期間ちゆう需要の大きさにとり充分であるためには、特定の大きさを持たねばならぬ」[7]という具体的な必要のために、商品の形態でおこなわれるのであって、いわば「在荷の正常形態」であり、このばあいの「商品停滞は商品販売の必要条件だと考えられる」[8]ものである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

このような在荷形成によって生ずる費用がここでいう第一種保管費用をなすのである。これに対して、例えば投機上の目的とか、販路の梗塞とか、恐慌などのために生ずる在荷形成がある。このような在荷形成はいずれの社会形態にもあるというものではなく、「商品生産一般の、および一般的・絶対的な形態での商品生産すなわち資本制生産の独自的性格」[9]から生ずるものであり、これは「商品が販売されないことの結果」から生ずる在荷であるので、いわば「在荷の異常形態」である。このばあいの商品停滞はなんら商品販売の必然条件をなすものではない。このような在荷形成によって生ずる保管費用が第二種保管費用をなすのである。ところでこのように保管費用を二つに峻別することの重要性は保管費用として投下された労働が商品の価値に入りこむか否かにかかっている。すなわち第一種の保管費用は「特定の範囲内で商品の価値に入り込み、したがって商品を高価にする」[10]のであるが、これに反して第二種の保管費用は「商品の価値には入りこまないで、価値実現における控除・価値損失をなす」[11]のである。

さて、ここでふたたび安部教授の所説に立ち戻ろう。教授はすでに述べたようにこの保管費用の二つの種類を区別され、保管費用が生産的である根拠を「使用価値の減少の制限」ということに求めるならば、両種の区別が抹殺されてしまうといって批判されるのである。この批判には異論があるわけではない。問題は教授自身の解答である。それでは、教授自身は保管費用の生産的性質の論拠を何に求められているのであろうか。このばあい右の批判を生かすためには、保管費用の第一種のばあいには生産的であり、第二種のばあいには不生産的であるという両者の区別を明らかにする論拠が必要であることを注意しなければならない。教授は果してこの理論的要請に答えているであろうか。要約して曰く「それ〔保管費用—橋本—〕は、流通費用でありながら、しかも生産費用である。即ち、保管という利用効果を生産するのであって、同時に価値増殖を遂げる」[12]と。教授の論拠の核心がここにあげられた利用効果の生産にあることは、詳細な論究の展開を通じて極めて明白である。このように保管費用の生産的性質の

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

論拠を「使用価値の減少の制限」でなくして「利用効果の生産」におきかえたとしたら、前者では説明出来なかった保管費用の二つの種類の区別が果してつくのであろうか？ 保管費用が利用効果を生み出すのは事実であるが、しかし利用効果を生むということによって保管費用一般の生産的性質ではなく第一種保管費用のみの生産的性質を説明することになるのだろうか。そうはならない。事態はやはり同じことである。なぜならば、第二種の保管費用も同じように利用効果を生むからである。利用効果から説明出来るのは教授が批判されたばあいと同じように保管費用一般の生産的性質にとどまるであろう。

それでは保管費用の生産的性質は何によって説明されるべきであろうか。この利用効果の生産は保管費用の生産的性質を説明する第一の条件ではあるが、これだけでは不十分なのである。そこに第二の条件を必要とする。第二の条件とは、利用効果が生産されると同時にその消費が社会にとって生産的におこなわれ価値が追加されるということ、すなわち、商品生産形態の独自的性格にもとずく在荷形成に消費されるのではなくして、社会的に必要な在荷形成に消費されるということであり、この二つの条件が揃わなければならないのである。もっとも教授は、第二の条件を全然無視しているわけではない。あるところでは「かくて保管費用が、売買費用と異なり純粋な流通費用ではなく、生産費用たるの性質をもっているといわれるのは、それが、社会的生産の商品形態にのみ起因せず、また、価値の姿態変換にのみ関係するのではないということのほかに、この費用によって使用価値従って価値減少の制限という利用効果そのものが生産せられ、而して労働力が流通せしめられれば（？―橋本―）そこに価値増殖が行われるということに最深の根拠があるのである。」[13]とも述べられている。しかしながら教授の論旨の展開を通じてみると、先に引用した要約にもみられるように、第二の条件が軽視あるいは無視されているという傾向を否定することは出来ないのではあるまいか。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ともあれ、教授が右のような矛盾をおかした原因は、保管費用の生産的性質を説明するにあたって一方の利用効果を生み出すという面のみに着目し、他方の、利用効果が社会的に必要な在荷形成に消費されるという面を看過したためである。その上、このような利用効果を生み出す面のみを偏重した原因をさらに追求してみるならば、それは教授が保管費用を本来の生産費用と同一視され、混同されるという基本的な問題の誤りに結びついているように思われる。そこで、われわれは節をあらためて、この問題、すなわち保管費用や運送費用と本来的な生産費用との異同について考察を進めることにしよう。さらにこの考察においては安部教授のみならず、他の諸理論をも併せて考察することにしよう。

(1) Karl Marx: Das Kapital, Dietz Verlag. Bd. II, S. 127, 長谷部文雄訳　日本評論社版　第五分冊　二五二ページ、青木文庫版　第五分冊　一七二ページ。(以下、資本論にかんしては、Das Kapital II S. 127, 日評　五―二五二　青文　五―一七二、と省略することにしたい。)

(2) Das Kapital, II, S. 123, 日評　五―二四六　青文　五―一六七

(3) Das Kapital, II, S. 143, 日評　五―二八二　青文　五―一九二

(4) Das Kapital, II, S. 131, 日評　五―二五九　青文　五―一七七

(5) Das Kapital, III, S. 319, 日評　九―二八五　青文　九―四一三

(6) 安部隆一「流通諸費用の経済学的研究」三五ページ

(7) (8) Das Kapital, II, S. 141, 日評　五―二七八　青文　五―一八九

(9) Das Kapital, II, S. 134, 日評　五―二六五　青文　五―一八〇～一八一

(10) Das Kapital, II, S. 133, 日評　五―二六三　青文　五―一七九

(11) Das Kapital, II, S. 142, 日評　五―二八一　青文　五―一九一

(12) 安部隆一　前掲書　六二ページ

(13) 安部隆一　同上書　五二ページ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

三

本来の生産費用が価値と使用価値を生むことはいうまでもない。また、流通諸費用のうち、純粋な流通費用がなんらの価値も使用価値も生み出さないこと、これもまた明白である。ところで問題は、保管費用と運送費用は果して価値を生み出すのであろうか、また使用価値を創造するのであろうか、という点にかかっている。

先ず第一に、保管労働と運送労働は使用価値を生み出すと解釈してよいのだろうかという問題から考察を進めてゆこう。

例えば江原又七郎教授は運送費用について次のようにいわれている。「運送費は生産資本そのものであり、かくて積極的に生産物形成をなし、かかるものとして価値創造にかかわるものであり、社会的富を増大する」[1]と。教授のいわれるように運送費用が「生産物形成をなし」「社会的富を増大する」とすれば、運送費用はあきらかに使用価値を生み出すものでなければならないし、またそう理解されているのである。また他面「価値創造にかかわる」ものとすれば運送費用はまったく生産費用と同一に理解されているわけである。ここに完全な同一現がみられる。さらに江原教授の理解する保管費用は、運送費用とその性質を異にしている。なぜならば「保管費は使用価値を創造することなく価値を創造する。社会的富を追加することなく価値を追加する」[2]ものであると考えられているから。この見解では、第一に、運送費用では使用価値が創造され、保管費用では創造されないという「奇妙な創造」がおこなわれている。誤りであることはいうまでもない。運送費用も保管費用もその本性においてはまったく同一なのである。

ともあれこのような見解は運送費用を生産費用とまったく同一視する従来の見解の一つの典型ではあるが、すべ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

てがこのような暴論であるわけではない。多くの人々は、保管労働や運送労働が利用効果を生み出すことを認め、問題はこの利用効果をどのように理解するかにかかっているのである。

先ず安部教授によれば「ここに、利用効果とは、使用価値の一変化であって、それが対象的な形態をとらぬ場合をいう。(対象的形態をとる場合には、その生産物が使用価値とよばれる。)」[3]と述べられている。また富永教授も「利用効果は単なる効果――例えば審美的、或いは技術的――と違って、使用価値の一種または一変化だと考えられる。またそうでないなら、資本制社会を対象とする経済学の関心内に入ってこない」[4]と同じように使用価値の一種と述べられている。この点はいわば従来の通説をなすものであり、森下教授も「したがってまたそれは〔場所的移転は―橋本〕ある意味における使用価値といわなければならない。特にある意味で、というのはこの使用価値は一般の使用価値と異って、有体物の形態をとらないからである。その意味でそれは通常の使用価値と区別して有用的効果といわれる」[5]と述べられている。しかしながら右の所説のように、利用効果を使用価値の一種であると主張することには問題があるように思われる。右の諸氏はこのように「使用価値の一種」であることを主張されることによって、保管費用や運送費用は純粋な流通費用と異なって生産費用であることを根拠ずけようとされているのであろう。しかしそれならば利用効果を生み出すということで十分ではなかろうか。その上に使用価値の一変化を主張することは行きすぎとなって本来の生産過程と区別されるべき保管費用や運送費用の特殊性が見失われる結果になるように思われるのである。

それにしても使用価値の一変化であるというのは、何を根拠としていわれるのであろうか。もし、物に対象化されない、有体物の形態をとらないという点を根拠にして「一変化」であると主張するとすれば、対象化されないという面は使用価値とは異なるという点を強調すべきではなかろうか。特に安部教授はその「価値論研究」において、

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

周知のように使用価値は物である点を強調されているだけに、ここで物に対象化されない利用効果を使用価値の一変化だと主張することは論理一貫せず、したがって理解しにくい主張であるといわねばならない。また一方で使用価値の一種を生み出すことを主張されているので、他方では保管費用、運送費用が空費であるという論拠を主張するにあたっては困難を伴ってくることになる。そこで教授は「利用効果の消費は、何らの使用価値もつくり出さぬ」(6)といわなければならなくなっている。消費が何らの使用価値をつくり出さないから空費なのではない。使用価値を生産しないから空費なのである。消費が使用価値をつくり出さないことを空費の論拠とするならば、生産物に対象化された使用価値も、個人的な消費にあてられるばあいはすべて空費になってしまうであろう。有用効果の消費はすでにみたようにその保管費用や運送費用が価値を追加することが出来るか否かの条件にはなるが、安部教授のように有用効果の生産と消費とを分離され、その生産という面からは生産費用であることを、消費という面からは空費＝流通費用であるということを主張するのは何としても理解できないところである。

ところで、この使用価値の一種又は一変化であるというばあい、その根拠を積極的に示されているのは富永教授である。教授によればその根拠を、保管費用や運送費用は使用価値に作用するという点に求められ、作用するという意味は「使用価値の創出、維持、実現に直接参加する」というように理解されている。保管費用や運送費用が単なる商品の形態転化にかんするだけではなく、使用価値の維持、実現にかんするという点は、たしかに純粋な流通費用と異る点であろう。しかしながら、この論拠は、保管労働や運送労働が「使用価値の一変化」を生み出すという理由付けのためにもち出すのではなくて、これらの費用が価値を追加出来るばあいの論拠にもってくるべきではなかろうか。というのは、使用価値の創出、維持、実現はいずれの社会においても必要なことであり、保管労働がこのようないずれの社会においても必要な使用価値の維持、すなわち本来的在荷の維持に充用されるときには価値

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

を追加し、また運送労働も使用価値の実現のために社会的に必要な運送に充用されるばあいには価値を追加するのである。したがって保管費用や運送費用が、投機や販売停滞のように、使用価値の社会的に必要な維持・実現にかんしないときには、その商品に価値を追加しないのである。だが利用効果そのものは、このように価値を追加しないばあいでも生みだされるのではなかろうか。例えば投機のための保管や運送においては、価値は追加されないが、やはり「使用価値の減少の制限」という利用効果、「位置変化あるいは場所変動」という利用効果はやはり生み出されているのである。保管という利用効果が生み出されていないとすれば、投機のための商品在荷に支出される第二種保管費用をいくら支出してもその商品はすべて腐敗し、またすべて運送することもできないという結果になる。要するに保管費用や運送費用が、有用効果を生むということは、価値を追加するということの基礎をあたえるものではあるが、それから直ちに保管費用や運送費用が使用価値の一種を生み、価値を創造するというように、本来的な生産過程と同一視する考え方の論拠にすることは疑問とされなければならないように思われる。

さらに、従来の見解では、利用効果という概念が、使用価値の一変種として保管労働や運送労働のばあいだけに存在し、他のばあいには存在しない概念のようにもみられる。だがそうであるとすれば誤りであって、マルクスも「この〔有用的労働の—橋本〕観点のもとでは、労働はつねに、それの有用的効果に関連して考察される。」(7)と述べているように、利用効果は、有用的労働であればたんに保管労働、運送労働にかぎらず、いずれの生産過程の労働においても生み出されるものであり、その利用効果が対象化されてはじめて使用価値になるものと理解すべきであろう。したがって利用効果は生産過程一般に通ずる概念であって特に保管労働・運送労働のみにかんするものではないが、この両労働のばあいには本来的生産過程のばあいのように使用価値として物に対象化されないために利用効果と呼ばれているのである。駄足ではあるが、エンゲルスが「反デューリング論」で社会主義社会の生産計画を論ず

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

るにあたって利用効果という概念を使っているが、[8] これもこのような理解を裏付けするものではないかと思われる。

要する諸説の吟味を通じていいうることは、保管労働や運送労働は、利用効果を生み出すものではあるが、利用効果を直ちに「使用価値の一変種」と考え、両労働を本来の生産過程の労働と同一視することはできない、ということであり、使用価値は生み出さないと考えるべきであるということである。マルクスも明確に保管費用のことを「商品の使用価値を追加することなしに商品を高価にする費用」[9] と呼んでいるのである。ともあれ使用価値を生まないということによって本来的生産過程とははっきりと区別され、保管費用や運送費用が空費であるということもまたこのことによって明確に理解されるようになるのではなかろうか。

次に眼を転じて、第二の問題、すなわち保管費用と運送費用は、価値を創造すると解釈してよいであろうかという問題に入ってゆこう。

ここでも従来の諸説はすべて価値を創造し、価値増殖を遂げると考えてきたようである。例えば安部教授や江原教授はすでに掲げたように、それぞれ「価値増殖を遂げる」といわれ、「価値創造にかかわるものであり」といわれている。[10] さらには最近のソ同盟における商業資本の研究水準を示すトクマライエヴも「価値も剰余価値も創造する」と述べているし、また古くはローゼンベルグも同じように考えている。すなわちスペクタートルは、「運輸は価値の創造者であるという言葉は、まったく変にきこえる。」といってレンナーを批判しているそうであるが、ローゼンベルグはこのレンナーに対する疑問をさらに反批判して「運輸においても、他のあらゆる生産部門におけると同様に、価値が創造されるのである。」[11] と述べている。以上の如く「価値を創造する」というのが従来の通説である

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ように思われる。しかし果して「価値を創造する」と解釈してよいものであろうか。この点についてはすでに伊藤岩教授から次のような疑問が提出されている。「安部教授のマルクス解釈によれば、価値の担手は使用価値及び利用効果という事になる。保管費及び運送費が社会的に空費であるならば、価値が社会的である以上、個別的には、価格の追加はなしえても価値は生産しえないのではあるまいか。」[12]と。この点はたしかに私にとっても甚だ理解しがたい困難な問題であった。

そこで多少細かい点に立ち入るが、資本論における表現を注意してみると次の如くになっている。「だが価値を追加する労働はすべて剰余価値をも追加しうるのであり、また、資本制生産の基礎上ではつねに剰余価値を追加するであろう。けだし、労働の形成する価値は労働それ自身の大いさに依存し、労働の形成する剰余価値は資本家が労働に支払う範囲に依存するからである。」[13]またいっている。「だから運輸業に投下された生産資本は、運輸された生産物に価値を追加する、――一部は運輸手段からの価値移譲により、一部は運輸労働による価値追加によって。この後にあげた価値追加は、すべての資本制生産においてそうであるのと同様に、労賃の填補と剰余価値とに分かれる。」[14]このように保管労働や運送労働が「価値を追加する」といっているばあいには訳語では「追加する」となっているが、原語では zusetzen であり、この zusetzen は、資本論第一巻において直接的生産過程を分析するにあたり、「防績工の労働は、それの抽象的・一般的属性においては、人間的労働力の支出としては、綿花と紡錘錘との価値に新価値を附加するのであり……」[15]というばあいの「附加する」zusetzen と同じ原語であって、原文ではなんら表現上の差異はみられないのである。したがってこのような表現からみると保管労働や運送労働は何ら本来的生産労働と異ならないようにみえる。さらにまた、マルクスが資本論を完成するために一八五七・八年頃に書いた準備ノート「経済学批判綱要」では次のように述べている。「流通が価値を創造しうるのは、流通が直接的生産過程

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

において消費する労働のほかに、新規の労働――他人の労働――を必要とするかぎりにおいてである。さらにこのことは、あたかも直接的生産過程において、一層多くの必要労働が使用されるばあいと同じことである。現実的流通費用のみは生産物の価値を高める、けれども剰余価値を減少させる」[16]と。この引用においても、マルクスはあきらかに「生産物の価値を高める」erhöhen といっている。以上のようなことから、現実的流通費用、すなわち、保管費用や運送費用を、本来的な生産費用とまったく同一視してよいものであろうか。そうだとすれば、右の「綱要」からの引用の最後にみられる「けれども剰余価値を減少させる」という一句は果してどのように理解したらよいであろうか。一方では価値を高め他方では剰余価値を減少する、ということは理解しがたい難点である。現実的流通費用のばあいは別として、本来の生産費用のばあいではこのような矛盾したことはありえない筈である。

この「綱要」にみられるマルクスの思想は、資本論の次の一節に発展しているように思われる。「それは他面では、社会的に考察すれば、労働――生きた労働であれ、対象化された労働であれ――の単なる費用・不生産的支出・でありうるが、それ故にこそ個別的資本家にとっては価値形成的に作用し、彼の商品の販売価格への一追加分をなしうる。」[17]ここではあきらかに、本来的生産費用との相異が認められる。「価値を形成する」ではなくして、「個別資本家にとっては価値形成的に作用し」wertbildend wirken と表現されている。つまりさきにみたように、「価値を追加する」あるいは「高める」と表現されたばあいには、個別資本の観点に立つばあいをいったように思われる。個別資本の観点に立てば、保管費用も運送費用も、それぞれその商品の価値に「販売価格への一追加分」として価値を追加し、価格を高める。そのばあいどれだけの価値を追加出来るかは、生産部面の相異、すなわち商品の種類や品質あるいは生産地と消費地との関係等々の具体的諸事情によって異ってくるであろう、しかしいづれの部面においても、その費用が社会的に必要な保管や運送に支出されていることが前提となる。逆にいうならば、投機その他の資

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

本制商品生産の独自的性格にもとずく保管や運送に支出されたものではないということが前提となるのである。

しかしながら「社会的に考察すれば単なる費用であって労働の……不生産的支出である。」というばあいの社会的観点に立てば事情は異ってくる。ところでこの社会的観点とはいかなる意味であろうか、私には社会的再生産の見地であるように思われる。社会的再生産を――単純再生産であれ拡大再生産であれ――円滑に進行せしめるためには、価値視点から、また素材視点すなわち使用価値視点から年々填補されて行かなければならない。しかるに純粋な流通費用はもちろんのこと、保管費用も運送費用もさきにみたように決して使用価値を生み出すものではない。「商品の使用価値を追加しないで商品を高価にする費用」[18]である。したがってこのような保管部門や運送部門の填補は、価値的にも素材的にも結局は本来的生産部門からおこなわなければならないのである。だからこそこれらの保管・運送部門では価値的には、さきにみたように本来的生産部門で創造された「剰余価値を減少させる」ことによって本来的生産部門から填補されなければならないのである。また他方、素材的には、「社会的生産物のうちから填補されねばならぬ」[19]のであり、「生産物からの控除をなす」[20]のである。思うに、純粋な流通費用はもちろん保管費用や運送費用を含めて流通費用はすべて「社会的富の空費」[21]であるとされるのはまさにこのような意味においてであろう。またさきに「経済学批判綱要」のなかでみられた「剰余価値を減少させる」というばあいの意味も、まさにこのような社会的観点に立って理解すべきではなかろうか。

他面、個別資本の観点に立てば「特定の範囲内で商品の価値に入り込み、したがって高価にする」[22]のである。その意味において「価値を追加する」と表現されている。しかしながら「価値を創造する」とか「価値増殖を遂げる」という表現を使っていないことを看過してはならない。[23]これは極めて細かい表現の相違ではあるが、その背後には社会的観点からみれば生産物からの控除になり、剰余価値からの控除にもなるという事情が潜まれているためであろ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

う。だからこそ保管費用や流通費用は、使用価値を生み出し、価値を創造し、価値増殖を遂げることがはっきりしている本来的生産過程とは、明確に区別されなければならないのである。したがって前に掲げた諸説の如く、これらの費用が「価値を創造する」あるいは「価値増殖を遂げる」と理解することは疑問とされなければならないのである。

以上、本稿においては、主として安部教授を始めとする諸教授の通説を批判的に考察し、その吟味によって、保管費用や運送費用の経済的性質は本来の生産費用と異るということを明らかにしようと試みたのである。しかしながら、その批判には、あるいは先学諸説の誤解にもとづくものがあるかもわからない。そうだとすれば無根の批判を犯すわけであって御詫びしなければならないと思う。さらに本稿では、批判を中心としたので多くの問題を残すこととなった。保管労働と運送労働が本来的生産過程の労働と異るということを主張せんとする本稿の意図は、本来ならば生産的労働の問題として、論ぜられるべき問題であろう。さらに保管労働や運送労働の価値追加にかんしても私自身まだ疑問とされるべき問題が残されている。これらの問題は批判を中心とする本稿ではすべて残された問題としておかなければならなかった。

（1）（2）江原又七郎「流通費用の価値形成並に平均利潤率の形成への参加について」宇都宮大学学芸学部研究論集　第二号（昭和二七年一一月）四九ページ

（3）安部隆一「流通諸費用の経済学的研究」四〇ページ

（4）富永祐治「交通労働の生産性」経済学雑誌　第一九巻　第一号（昭和二三年七月）

（5）森下不二也「商業経済論」六一ページ

（6）安部隆一　前掲書　六二ページ

（7）Das Kapital, I, S. 46 日評　一―一八六　青文　一―一二四

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(8) F. Engels: AntiDühring, 1877, 長谷部文雄訳 岩波文庫版 下 二三七ページ
(9) Das Kapital, II, S. 131, 日評 五—二六〇 青文五—一七七
(10) S. F. Tokmalajew: Handelskapital und Handelsprofit. 1952, S. 31
(11) ローゼンベルグ「資本論註解」/梅村二郎訳 第五分冊 二〇三ページ
(12) 伊藤岩「地代・流通費」 新潟大学経済論集 第三巻 第二号 一〇ページ
(13) Das Kapital, II, S. 131 日評 五—二六〇 青文 五—一七七
(14) Das Kapital, II, S. 144 日評 五—二八四 青文 五—一九三
(15) Das Kapital, I, S. 209 日評 二—一一五 青文 二—三六三
(16) K. Marx: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, 1953, S. 446
(17) Das Kapital, II, S. 131 日評 五—二五九 青文 五—一七七
(18) Das Kapital, II, S. 131 日評 五—二五九 青文 五—一七七
(19) Das Kapital, II, S. 133 日評 五—二六三 青文 五—一七九
(20) (21) Das Kapital, II, S. 139 日評 五—二七四 青文 五—一八七
(22) Das Kapital, II, S. 133 日評 五—二六三 青文五—一七九
(23) なお細かいことではあるが、保管費用を論ずるにあたって、「諸商品の価値がこの場合維持または増殖されるのは……」という表現がみられるが、このばあいの増殖は vermehren であって「価値増殖する」verwerten とは異ることを注意されたい。(Das Kapital, II, S. 133 日評版五—二六四 青文 五—一八〇)